

## 第四十 日本之文章

佐藤 寛

### 第一節 我が國の古文及び古文衰退の原因

我が古文の正しきことは、聲音言語の正しかりしに依れるは、いふまでもなけれど、其の語勢の優にやさしく、句調の雅にたへなるは、實にたぐふべきものもあらずなむ。さて古文の殊にすぐれたるは、古事記に見えたる、安河御誓の段の初天照太御神の御装の文、又御子生の文、又天之石屋戸の段の、諸神等の招法の文、又御孫命御天降

の段の高千穂の嶺に御天降の文、又書紀に載せたる顯宗天皇の寶壽の御詞踐祚の日に中臣氏の奏せし天神の壽詞、及び上代の祝詞宣命などは、我が國純粹の古言を以て、連ねたるものにて、其の正しかりしこと知るべし、さて古へには、かく文章成りと、のひて、めでたく美はしかりしに、如何にしてか、後世には、鄙びにさとびて、其のいひざま拙なく、いろくさまぐに崩れゆきけむ、といふに、此は一朝一夕の事にはあらず、掛まくも畏き、輕島明宮に御宇應神天皇の御世を始め奉りて、漸々に我が聲音言語に汚濁の出で來しに、隨ひて文章も自から下りにけむ、是れ我が古文衰退の一因なり、然るに孝德天皇の御代より、さらに制度典章を改めて、凡て漢土の風に倣はせたまひしかば、詔勅、官符、國史、律令はさらにもいはず、表だちたる通行文は、ことごとく漢文ならざるはなかりしかば、上下一般漢文を作ること、はなりぬ、されども猶詔勅と並びて、此の國文なるは、宣命をも用ゐさせたまひしは古文をも存せられしものなるべけれ、動もすれば、それさへ漢文めきたる文、又全く漢文なるもあり、佛風ホトケザキの文もいりまじりて、いとく妄がはしくなりゆきけり、此等の文の語勢は、祝詞に似たれども、亦自然異なるものにて、別に一つの體を成せり、かくて世に立て

る男子の文といへば、必美はしき漢文に書く風となりしかば、此の國文は漢學を能くせざる輩と、婦女子との間にのみ行はる、こと、なれり、是れ我が古文の衰退せし二因なり、さて此の二因によりて、古文は全く亂れにみだれて、作るものは更なり、そを誦むものさへいと稀れになりゆきにけむかし、

## 第二節 雅文の起原及び我が國諸文體の沿革

空海が平假字を作りし頃より、假字書きの文起れり、之を雅文といふ、さてその祖文といふは、竹取物語、伊勢物語なるべし、此の二書いづれか先いづれか後といふ事詳ならず、文の體は、竹取は詞の續き、辭の用ゐざま、最、正しく嚴かにして、法とすべき所多きものなり、伊勢は詞少く意を含めて、なだらかに書きなしたる、はためでなければ、古文の格に近きは、猶竹取の方ならむか、之に次ぎて古きは、宇津保物語なれども、其の體や、下り古の格に達へる所少からず、其れより降りては、土佐日記なり、此は日記といふもの、祖書にて、いと面白く書きなせるものなり、之に次ぎては古今集の序なり、此は平假字書きの序文の始めにて、詞を綾なせるさま、極めて美はしきも古文に比べては、其の格かなはざる所もあらんか、之より降りては、住吉、大和、落窪等

の物語もあれども、先づは源氏物語なるべし、其の詞は然ばかり綾なせるにもあらざれども、言毎に意を含めて、抑揚頓挫波瀾曲折などいふものさへ自からに具はりて、巧みに奇しく、長高く書きなしたるものなり、枕草子は、又これに繼けるものにて、やゝ下れるにや、さてかく孰れも平假字書きの文にて、孰れも巧みには書きなしたるものから、其の字法句法などを尋ねれば、大方漢文の格ならざるはなし、因て案するに、こは漢文の格にはあらで、和漢その文格を同うせるものにや、さて此等の文、皆雅なる詞を以て面白く書きなしたる故にや、後世まで詠歌に用ゐる詞となりしかば、今にいたるまで、我が國の雅文といへば、皆此の頃の體を學びて書く事とはなりぬ、されど古きものに、女子の筆多きは、猶男子は、漢文、又は漢文直譯やうの文をのみ、専らかける故なるべし、しかるに、平常漢語を専ら交へて、通行する世となりては、俗間に行はるゝ國文も、亦然らざるを得ず、故に保元平治物語、源平盛衰記、太平記等の軍記にいたりては、所謂雅文と大に違へる所あるは、自づから一體を成し、ものといふべし、古へよりの漢文直譯やうの體を變じて、又自づから一體を成し、ものといふべし、すべて鎌倉執政以來、武道を重じて、文教を次とし、且亂世に及びては、漢文漸く衰

へ此の國風の雅文も、隨ひて古の如くならざりき、そは漢文體の衰へしは、貞永式目、東鑑等にて知るべく、雅文體の衰へしは、十六夜日記、徒然草等にて知るべし、然るに徳川氏執政以來、文運盛に學士輩出して、漢文は古にも立ち勝れり、於是加茂真淵、本居宣長の兩大人、又我が國の雅文の衰へて見るに足らざりしを、古に復せしより、國學者と稱する輩は、概、中古の雅文に據りて、物かく事とはなれり、中に就て村田春海、清水濱臣、藤井高尙などいふ諸學士たち、殊に雅文に長じて、後輩を鼓舞せられしかば、雅文を學ぶものも、稍、出で來にたるが、幾程もなく世は維新となりて、朝廷に仕へ奉る人々に、又漢學びせしが多ければ、にや、詔勅諭達等の文を始めとして、年月に行せる諸學者の著述にいたるまでも、拙陋を離れて、正しくうるはしく物せるが多かるに、おほかたは漢文直譯やうの文なり、かくて、又洋學といふもの、日にけに盛りになりゆきつゝ、漢學はやゝ衰へむとする姿となりて、日々月々に印行する新聞雜誌などいふものも、暗に歐文直譯の格を含みて、又大に面目を一新せしもの、如く、平常の談話にも、又演說討論などにも、彼、自身、其、自身、又看よ、看よ、何々を看よ、などやうに、直譯の語を使用するにいたりて、全く雅文を顧みるものなきに至れり、かく

變はりに變はりたれども、其時々文體悉く廢れたりといふにはいたらず、猶雅文あり、漢文あり、雅文漢文の崩れしものもあり、又和漢混淆せるもの、雅俗錯綜せるものなど、いろ／＼さま／＼なるありて、詔勅諭達より新聞小説などの、はしたなきものにいたるまで、各その體を異にして、孰れが是か、孰れが非か、定見なき輩には殆ど適歸する所を知らざるまでになれり、されば此等の文體の事に就きては、いろ／＼の議論の出づるも、亦已むを得ぬ事なりかし。

第三節 現今我が國に行はる、諸文體の得失及び矢野文雄氏の意見  
現今世に行はる、文體は、大方左の如くならむか、今次ぎ／＼に、其の得失を論せむとす、但漢文は我が國風のものならねばいはず。

## 雅文體

年立ちかへるあしたの空の氣色、なごりなく曇らぬうら、げさには、數ならぬ垣ねの内だに、雪間の草若やがに色づきそめ、いつしかと氣色だつ霞に、木の芽も打けぶり、おのづから人の心ものびらかに見ゆるかし源氏初音の巻

此の體、近頃より公私の女學校の課程に入り、且國語、國文などいふ、諸雜誌に、競ひて

物すめれば、やう／＼に盛りになりゆきなむ、されども普通には至りがたくや、

## 同變體

鏡は一物を貯へず、私の心なくして、萬象を照すに、是非善惡の姿顯れずといふ事なし、其の姿に隨ひて感應するを德とす、是れ正直の本源なり、玉は柔和善順を德とす、慈悲の本源なり、劍は剛利決斷を德とす、智惠の本源なり、此三德を翕せ受けずしては、天下の治まらむ事、誠に難かるべし神皇正統記

此の體は和漢混淆體ともいふべく、作者物し易く、讀者解し易く、今の世にはいと便りよきものといふべし、

## 漢文直譯體

昔シ莊周夢ニ胡蝶トナリ、栩栩然トシテ胡蝶トナリ、自ヅカラ志ニ適スルニ喩フルカ周ヲ知ラザルナリ、俄ニシテ覺ムレバ、則遽々然トシテ周ナリ、知ラズ周ノ夢ニ胡蝶トナリシカ、胡蝶ノ夢ニ周トナリシカ、周ト胡蝶ト自ツカラ分アラシ莊子  
此の體、今の學者たちの著書、又新聞雜誌等に往々見ゆれども、かく純粹なるは、亦稀れなるべし、

## 同變體

深宮ノ中ニ向テ春ノ日ノ暮レ難キコトヲ歎ゲキ、秋ノ夜ノ長キ恨ニ沈マセ給フ、  
金屋ニ人ナクシテ、耿々タル殘ノ燈ニ背ケル影、薰籠ニ香消エテ、蕭々タル暗雨ノ  
窓ヲ打ツ聲、物毎ニ皆御涙ヲ添フル媒トナレリ、人生莫作婦人身百年苦樂由他人  
ト白樂天ガ書キタリシモ、理リナリト覺エタリ太平記

寛政天保の頃稗史小説などいふもの、世に行はれしより、此體盛りに用ゐられて、京  
傳馬琴などいふ戯作者等、よく之を學びたり、今馬琴の物せるものを舉げむに、  
膚いと白くして、楚臺の雪をも欺くべく、黒髪の長く匂やかなるは、未央の柳かと  
疑はれ、ふりたる衣に留奇南残りて、其のさま賤しからず、西施がいまだ吳宮に入  
らざるとき、野花偏に月にうるはしく、小町が玉簾を吟ずる時、暮雲月を吐くに似  
たり、個は是れ神か人か椿説弓張月

此はよく上の文に似せたれども、馬琴は大方句を五七に綾なして、華麗を旨とせし  
ものなれば、太平記全體の文に比べたらむには、其品格無下にいやしかるべし、され  
ば漢文直譯變體の、又變せるものといはむか、

## 歐文直譯體

若シモ汝ガ僅カナル才能ノ母ニヨツテ、小供ノ取扱ヒヲ氣付ケルナラバ、汝ハ子  
供ノ思想ト感覺ヲ想像スルトキニ、彼ノ女ノ顯ハス不行届ニヨリテ驚カサレ得  
ルスベンサア氏社會學

此等の體、多くは拙劣なる翻譯者の手に成れる翻譯書、又は和漢學の力なき人の物  
せる、新聞雜誌等に見ゆれども、先づは此變體の方なるべし、

## 同變體

適當ニ感覺ト稱スヘキ者ノ第一ハ、性質ノ感覺ナリ、身體ノ狀態ニ由リテ、或ル者  
ハ快樂、或ル者ハ苦痛、又或ル者ハ中性ノ感覺ヲ與フルコトハ、各人實踐シテ知ル  
所ナリ、矢島錦藏氏心理學

此は歐文直譯の變體なれども、猶直譯に近きものなり、そは前に引きたる文と、然か  
ばかりの差なければなり、さて此の兩體の文、うち見ては漢文直譯體の如くなれど  
も、之を分析する時は、ことごとく歐文にて、洋學を心得ざるものには、一目瞭然たる  
こと能はざるものなり、

雅俗混淆體

追てゆく詞、敦盛様ア太夫様へのふ、此の暗いのに只御一人あぶないわいのふ、御歸りといへども、當途アテドも波ちかき磯ばたをうろく、と袖は涙の玉織姫、夫を尋ね、朧夜に、心細身の一腰かい込み、あなたへ走りこなたへまよひ、須磨の浦邊をそこよ爰よと、尋ねさまよひ給ひけり、一谷嫩軍記

此の體は今殊に世に行はれて、日々に刊行する新聞の雜報又續き物などいふ類を  
始め、平假字を交へて物したる稗史小説院本戯曲の類は、皆此體を用ゐざるはなく、  
且その境域も廣くして、童蒙婦女子などにさへ讀み得らるゝものなれば、其の便い  
ふばかりなし、

さて以上列擧したる諸文體のうち孰れか今の人の便益にはなるといふに、己れは雅文變體なる神皇正統記の如き文と、此の雅俗混淆體なる嫩軍記の如き文とを以て答へむとす、そは今の世に行はるゝ文を見わたすに、いろ／＼さま／＼にて、更に定まりなきが如くなれども、基く所この二體に過ぎざればなり、但し嫩軍記の如き用ぬむといふにはあらず、そは漢文直譯變體なる太平記、盛衰記等の文をも折衷して、此の雅俗體の足らざる所を補ひさて程よく物すべきなり、

或人問ふ漢文直譯を用ゐむには、文字も亦漢字を用ゐざるべからず、我國の文字の諸外國にまされるよしは、貴説に依りて心得ぬしかるに猶漢字を用ゐむはいかゞ、答ふ、漢字はしげくして學びがたく、國字はつゞまやかにして習ひやすきも、世の人、國字を用ゐずして、漢字をも交へ用ゐることは、如何なる故よしありてかをおもへよ、國字のみにては、其の文章長くなるがうへに煩はしきこと言ばかりなく、諺に所謂、辨慶が薙刀を以てをべむけいがな、ぎなたをもつてなどやうに、句讀を讀み違へて、意の通せざらむ恐れさへなきにあらねば、人々皆漢字をも交へたるを好むなるべし、こは我が國には、いまだ綴字法のなきに依ることにて、若し綴字法早く定まらむに、たらむには、漢字は固より要なきものながら、習慣の久しき、今さらにいかゞはせむ、又問ふ、漢文直譯變體は、さてもありなむ、童蒙婦女子にも讀ますべき、雅俗混淆體にも、猶漢字を用ゐるべきや、答ふ、童蒙婦女子のためには、漢字の傍に訓義を施すべき也、此の事に付ては、矢野氏の説あり、左に記す、矢野氏は我が國の行はれたる文體を（の類）漢文變體（北條泰時の御成敗式目の文の類）雜文體（太平記の文の類）五體とせられたり、漢文體及其の變體は、我が國風の文にあらざるが前に擧げたる文體のうちにもこれ別、別にいはず、雜文體、兩文體、假名體等は、己れが前に擧げたる文體のうちにもこれ

かり、但矢野氏の意見とは、聊か異なるものあるべし、聊

抑、兩文體ナル者ハ、實ニ意外非常ナル便利ヲ、世人ニ與ヘシ者ニテ、就中其ノ功ノ今日ニ大ナルハ、振リ假名新聞ニ及ブ者ナシ、是等ノ諸新聞ハ、日々ニ幾十萬枚ヲ發兌シテ、廣ク世ニ行ハレシムルハ、世人ノ知ル所ナリ、是等ノ新聞ナキ世ナランニハ、一日ノ中ニ一字ヲモ、讀ムコトナカル可キ婦人子供迄モ、今日ニテハ之ヲ讀ミ、新聞ヲ讀ム度ゴトニ、振リ假名ニテ幾分ヅハ、カ漢字ヲ見覺エ、漢字ヲ多ク知ラザル者ハ、假名ニテ之ヲ讀ミ、一日ニ一枚ノ新聞ヲ讀ムモ、幾千ノ漢字ヲ目ニ見覺エ、之ヲ見ルコト毎日ノコトナレバ、僅々五六ヶ月ノ間ニテモ、紙上ニテ漢字ニ出デ逢フコトハ、實ニ幾千萬度ナルヲ知ル可ラズ、サレバ如何ニ教育ナキ者ナリトモ、其ノ始メ唯四十餘字ノ假名ヲ知り居ランニハ、意外ニ早ク漢字ヲ覺エ最初ハ假名ニテ不便ナク之ヲ解シ、暫時ノ後ニ至レバ、其ノ既ニ見覺エタル漢字ニテ之ヲ讀ミ、未ダ見覺エザル漢字ハ、假名ニテ之ヲ讀ミ覺ユ故ニ紙上ニハ假名ニ依ラズシテ、漢字ニテ讀ムノ字モアル可ク、或ハ猶假名ニテ讀ム漢字モアル可シ、故ニ兩文體ハ假名體ト、漢字體トヲ兼テタルモノニテ、甲ニ對シテハ、假名體ト爲リテ

通用シ、乙ニ對シテハ雜文體トナリテ通用シ、同ジ一人ノ身ニ取リテモ、始メハ假名體ト見エ、後ニハ雜文體ト見ユ、斯ル一種ノ便利ナル文體ヲ、世ニ盛ナラシメシ故ニ昔ナラバ中々漢字ヲ讀ミ得ザル婦人子供迄モ、今ハ容易ク之ヲ學ビ得ルノ世トナレリ云々、

此の説にて、童蒙婦女子にも、さはりなきがうへに、便益の少からざるを知るべし、且普通の文字は、大方限りあるものにて、譬へばこれまで用ゐるこし普通文字に、拙者「貴殿」沙汰「都合」などいふ類、又今の世の「君」「僕」「我輩」「諸君」などいふ類、是れなり、此の事に付きて、矢野氏の意見あり、左に記す、

常用ノ漢字ニテ、名詞ノ人體ヨリ天地、山川、舟車、器具、禽獸、魚介、草木ニ至ル迄、凡ハ八百餘アリ、故ニ稀ニ用キル草木、禽獸、魚介ノ細名ヲ、之ニ附加ストモ、其ノ數ハ一千五百内外ニ過ギザル可シ、又働詞、形容詞、副詞、前置詞、代名詞、問投詞、接續詞ハ其ノ數合シテ、八百八十餘語ニ過ギズ、但シ虚字ニ屬スル名詞ノ「好」「等」右ノ八百ノ名詞ト、八百八十ノ働詞等ヲ合スレバ、其ノ總數千六百八十餘字ニテ足ルベシ、又一語ニテ唯一字ヲ所持スルモノアリ、然レドモ若シ其ノ一語ニ適當スル一字ヲ用

キズシテ、二字ヲ用キレバ千六百ノ文字ヲ更ニ減少シ得可キナリ、例セハ掌ト云ヘル適當ナル一字ノ代リニ「手心」ト書クガ如ク、手ト心トヲ用キテ、掌ト云ヘル字ヲ省ク類ナリ、然レドモ働詞ナドノ類ハ之ニ反シ、一語ニテモ意味ヲ異ニシ、多クノ文字ヲ要スルモノアリ、例セバ、「ウツ」ト云ヘル一語ニハ、數種ノ意味ヲ含ミ、隨テ又「伐」「擊」「拍」「打」等ノ數種ノ字ヲ要スルガ如シ、右ノ如キガ故ニ、働詞ナドハ、其ノ語數ハ八百餘ナリトモ、其ノ文字ハ多キヲ要スル場合アリテ、一語ニモ數字ヲ與ヘザルヲ得ザル者アリ、又一語僅ニ一字ノミニテ足ル者モアリ、故ニ今之ヲ平均シテ、一語ニ二字ヲ要スルト算當スレバ、餘リアルトモ不足ハナカルベシト信ズルナリ、然レバ今、働詞形容詞副詞前置詞間投詞接續詞等ノ語數ノ八百餘語ニ要スル字數ヲ、一千六百餘字ト假定ム可シ、而シテ名詞ノ方ハ、八百餘語ニ草木禽獸魚介ノ細名六百餘語ヲ附加ヘテ、之ヲ一千四百字ニ假定ムベシ、掌ニ手心ヲ用井程ニ充タル計算ナリ然レバ普通書ニ用キル可キ常用ノ字數ハ、其ノ總數僅ニ三千以下ニテ充分ナルベシ、余ノ經驗ニテハ、此ノ三千字アラバ、如何ナル文語文體ヲモ記シ得ザルコトナク、如何ナル高尚ノ事柄ト雖モ、之ヲ記シ得ザルコトナク、獨リ普

通書ノミナラズ、文學書ト雖モ、猶是ノ字數ノ範圍内ニテ、之ヲ辨ズルニ餘リアルベシト思ハル、但シ文學書ノ中ニテ、古文或ハ古字或ハ古支右ハ充分ニ見込タル計算ヲ云フ者ニテ、實際ハ普通ノ文書部ニハ、一千五百以下ニテ足ルベシト思ハル、

此は實にさる事にて、己れも早くより此の考へはありけり、然るに今矢野氏のいはれたる意見と暗合せしこそ、いとうれしき事なりけれ、さて此の二三千の漢字に、我が五十の國字を交へ、一定したる文體を用ゐて、もろもろの事を書き記さむには、其の簡便なること、げに萬國に類なかるべし、